
足跡の理由

瓜葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

足跡の理由

【Nコード】

N7091T

【作者名】

瓜葉

【あらすじ】

以前に書いていた小説を改題し、手直ししながら投稿していきます。

幼馴染の幸平と沙耶。幸平の初恋は沙耶だけど、そんなことすっかり過去の話の筈だった。でも高校3年生になり、二人の関係に変化が……。恋愛だけではなく、親のこと進路のこと、青春には悩みがいっぱい。これは二人がちょっとずつ大人になっていくお話。

一生のお願い？（前書き）

R15とさせていただきましたが、どうしようかと迷う程度のこと
しかありません。

一生のお願い？

「お願いします。一生のお願い！次回からは絶対自分でやるからさあ、宿題写させて。沙耶様、お願い」

土下座状態で懇願する俺は、滝川幸平——高校三年生。

で、誰にお願いしているかと言うと幼馴染の井原沙耶——同じく高校三年生。

花？の受験生な訳だが俺は勉強はさっぱりで、頼みの綱は沙耶のみだった。

しかも、この週末、丁度サッカーの見逃せないカードがあってテレビに釘漬けだったんだ。

英語の宿題が山ほど有ったけどそれ何処じゃなかったわけだ。それで、今朝は自宅前で待ち伏せして、こうしてお願いしているのだ。

「宿題は自分でやらなきゃ意味ないでしょ」

冷たい目を向け、沙耶は取合ってくれない。

「そこを何とか、幼馴染の誼でさ、頼むよ」

「嫌よ」

「お願い！」

「……わかってるの？このままじゃ受験どころか卒業できないわよ」

グギッ！痛いことをおっしやる。わかってるよ、そんなこと。

「今日の宿題のところ、絶対にテストに出ると思うわ。写すだけじゃなくて、ちゃんと覚えてね」

そう言うと沙耶は鞆からノートを取り出し渡してくれた。

「ありがとう！やっぱり持つべき者は賢い幼馴染だよな」

実際、沙耶は学年でもトップの成績を誇る秀才だった。

中学の時は俺もそれなりの成績だった筈なのに——だから同じ高校に入れたんだが——今はやる気が全く起きない。

留年は恥ずかしい、出来ることなら卒業したい。そんでもって大学行って……しかし、その先が思い浮かばない。

俺のやる気が出ないのは、やりたいことが見つからないせいもある。志望校を決めるのだって『行けそうなところ』と考えてるだけで、具体的にはなーんにも思い浮かばない。

その点、沙耶は法学部狙い。将来はお偉い弁護士先生を目指してるらしい。きつちり三つ編みのもろ優等生タイプ。

幼馴染じゃなければ友達にはならなかったと思う。小学生の時は可愛かったんだけどなあ……俺はその頃を思い出す。

忘れもしない小学校の入学式。ワクワクドキドキの俺の横に座ったのが沙耶だった。

小柄で色白で、長い髪を可愛く結んでいて——俺に向かってニッコリ笑ったんだ。可愛い！当時6歳の俺は生まれて初めて一目惚れ状態になった。

悔しいことに証拠写真も残っている。皆が正面を向いて写っている集合写真に俺だけ隣りの沙耶のほうを向いているのだ——今となると痛恨の極みである。

何故なら、沙耶は滅茶苦茶、性格がキツイ！俺なんか何度泣かされたことか。

おまけに喧嘩の原因はいつも俺。だから家のお袋は泣いて帰って来た息子に開口一番「おまえが悪い！」って言う始末。

可愛いと最初に思ってしまっただけに悔しくて悔しくて……

そしてもう一つ腹立たしいのは、母親同志が妙に馬が合って、直ぐにお互いの家を行き来するほど仲良くなった事だ。

どちらも共働きだったので、俺と沙耶はよく一緒に留守番させられた。二人なら安心とでも思っていたのだろうか。

お互い一人っ子同志って事もあり兄弟のようなものだったと思う。

中学に入った頃、沙耶の両親が離婚した。理由は詳しくは知らない。沙耶も話さなかったから、俺も訊かなかった。

その頃から沙耶は弁護士を目指すと言明し、『男に頼らず一人で生きていく』みたいなことを卒業文集に書いていた。

1年と3年は同じクラスだったし、同じ塾にも通っていたが、あんまり話した覚えがない。

その年代の子供って異性の友達とはだんだん一緒に行動することはなくなっていくだろう？

俺もそうだった。「彼女ほしい！」と言っている割には奥手のグループに所属していたと思う。

沙耶はもちろん勉強も頑張っていたし、生徒会に所属して文化祭などの準備も頑張っていた。

仲良しグループを作ったというタイプではなかったけれど、少数でもかなり気の合う友人がいれば平気なのだろう。

中学時代、一生懸命やらなくてもテストの点数だけは良かった俺は塾から勧められるまま地域のトップ進学校を受験し、めでたく合格

してしまった。

思えばこの頃が俺のピークだったのかもしれない・・・。

一緒の高校に通うようになり、俺たちは再びよく話すようになっていた。

まあしかし、俺たちの関係は、相も変わらず俺が一方的に遣り込められている。

宿題の行方

借りたノートをそそくさと自分のカバンにしまった俺は気が楽になった。

英語の担当は哲ちゃんと呼んでいるサッカー部の顧問。

進学校だけあって、勉強をさばるとキツイお灸が待っている。勉強をしない！って奴自体が少ないのも確かなので、俺のように漠然と高校生活を送っている方が珍しいのかもしれない。

「幸平は志望校調査の用紙、提出した？」

一緒に電車に乗った車中で沙耶から聞かれる。

「まだ。あれ、来週までだろ？」

「そうよ」

「沙耶は？」

「一応は決めてるけど・・・」

「どこ？」

「・・・秘密」

聞くのは怖い気がする。

「そつえばD組の中野君と仲いいの？」

唐突にクラスメイトの名前が出る。

「中野？結構、一緒にいるよ。知ってるの？」

「うん、1年の時、一緒にクラスだったから」

そういえば沙耶と中野は同じクラスだったような気がする。

「中野がどうしたの？」

沙耶はちよつと考えてから

「家が病院なんだってね」

と、言う。

俺はそうだと答えながら、沙耶は何か違うことを話したかったような気がした。

「でっかい総合病院でさ、すげえ美人の姉ちゃんがいる」

「そうなんだ」

そう、ほんとにきれいなお姉さん。ずいぶん年が離れていて、もう医者になってるらしい。

両親とも医者で姉貴も医者になったらプレッシャーだろうなと思っ
ていたけど、中野裕也は飄々と高校生活を楽しんでいるように見える。

サボリ魔で、しょっちゅう学校に来なかったり、いつの間にか帰っ
ていたりする。

俺も中野みたいに、自分の思うままにしてみたい……。

俺のしたいことってなんだ？

沙耶も何かを考えているようで、中野の話をそれ以上することはな
く、俺たちは電車を降り学校に着いていた。

「ノート、さんきゅ。写したらすぐに返すから」

「4時間目に提出なんだから、忘れないでよ」

そう言つて沙耶は先に階段を上がつて行つた。

教室に着くと、話題の人物が俺を待ち構えていた。

「おはよう、幸平。なあ井原のノート借りた？」

「何だ、おまえ宿題やつてないのかよ」

「当たり前だ。借りたんだろ、ノート」

「ああ。うーんと厭味言われたんだから、おまえには見せない」

「困つた時はお互い様だろ、頼む俺にもノート見せてくれ」

中野も俺と同じで宿題やつていないらしい。

哲ちゃんの宿題をさぼると痛い目に合うので、これだけはやらねばいけないのだ。

なんだ彼んだと言いながら俺たちは英語の授業までに何とか宿題を写し終わり無事提出した。

ホツとしていたのに、なぜかそれがバレて二人とも呼び出しを受けた。

「これはなんだ？」

哲ちゃんが俺たちのノートを指さす。

「宿題です」

平然を装って答えると睨まれた。

「つたく、お前ら俺をなめてんのか？」

「いやいや、そんな恐れ多いことしてませんよ」

中野が隣で答える。

「井原のノートを写しただろう」

・・・そこまでわかるのか？

俺の視線が泳ぐのがわかったのか哲ちゃんは問題集を見せてくれた。

「読め」

はい？

俺は開かれたページを見た。

日本語の文章が書いてある。これを英文にするんだろう？

でも、なんだか文章が短い気がする。

設問2、それについてのあなたの考えを英文で書け！？はい？

「井原は女性としての意見を書いてるぞ。お前ら女か！」

もう謝るしかない。ごめんなさい、すみません。

「高校3年にもなって、これではな。井原の努力を見習え」

それから延々と説教が続いた。

「どうせ昨日の試合、見ててやるのを忘れたんだろ」

「その通りなんです」

見逃してくれるかと思ったら

「反省文を英語で書いて提出するように。滝川は提出するまで部活禁止だ」

「ええっー!!!」

部活禁止。それだけは困る。

「今日、やれば1日で済むぞ」

哲ちゃんが鬼に見える。

もう帰っていいと言われ、とぼとぼと職員室を出る。

今度から問題文ぐらい読んでから答を書こうと俺は心に誓う。

でも、こんなこと沙耶に言ったら余計に怒られそうだ。

俺は肩を落として帰路につく。

裕也はバンドの練習があるからとお気楽に去っていた。ほとぼりが冷めるまで学校を休むつもりかもしれない。

うらやましい。

自業自得か災難か

「はあ……」

居間のソファーに寝転がって吐いても仕方が無い溜息を繰り返す。

哲ちゃんとのやり取りと、その後のサッカー部の部長である浅野とのやり取りが繰り返しよみがえる。

「ごめん、浅野。オレ、哲ちゃんから部活禁止を言い渡されたんだ」
って言った時、部長の浅野は俺を視線で殺せるほど睨んだ。

「なんで？」

「なんでって、英語の宿題を沙耶の写して出したのがばれた」

「……」

こいつの無言の圧力は本当に怖い。

「いつまで？」

「何が？」

「……」

やばい、ほんとにやばい。

浅野のサッカーに掛ける情熱は半端ないのだ。

弱小サッカー部なのに、超ハードな練習メニューを組んでいるが、こなし切れていない。

試験前だ、模試前だと練習が出来なかったり、週5日までしか部活はやってはいけなとか進学校らしい変な規則があったり、塾があ

ると休む奴がチラホラいてなかなか全員が集まらないのだ。

浅野はだからいつも苛立っている。サッカーをもっとしたいのだ。実際に浅野はサッカーが上手い。どっかの某プロチームのジュニアに所属していたこともあるらしい。

本人は自慢したことはないが、一緒の中学だった奴が言っていた。なんで止めたのか不明だけど、もったいない。

「宿題なんて、さつさとやれば良いだけじゃないか」

そして沙耶と同じようなことを平然と言う。

浅野はこんなにサッカーに打ち込んでいても沙耶と同じようにトッブクラスの成績を取っている。俺だって、そうできるものならしたいと思うが出来ないものは出来ないのだ。

「もう直ぐ試合なんだぞ。簡単に終わらせて良いのか！とにかく明日には来てくれ。幸平がいないと困るんだからな！」

ホントにゴメン。いい加減なことが多いけど、サッカーのことだけは俺だって真剣だ。

浅野はそれをわかってくれる大切な友人だ。

だから、そんな友人に迷惑をかけることになったことが結構堪えている。

もう高校3年。部活によっては引退試合も終わっていたりする。

俺たちサッカー部にとって夏休み前の地区予選が最後の試合になるんだ。

勝ち残れば夏休み返上で練習！ってことになるのだろうけど、俺たちは進学校の弱小サッカー部なのだ。

やっぱり今度が最後になるのかな……。

とにかく浅野の言う通り試合は近いのだ、部活禁止を解除してもらうためにもこれを仕上げねば。

そう思いながら真っ白なままの反省文の紙を見つめる。

「めんどくせえ」と俺はつぶやいた。

玄関から音がする。親父が帰って来たみたいだ。

うちはお袋が看護師で親父は役所勤めの公務員。

比較的、定時に帰れる親父の方が炊事をすることが多い家庭だった。今日も親父が炊事当番なので沢山買い物でもしてきたのか、ガタガタと大きな音が玄関でしている。

「おい、幸平。ちょっと手を貸してくれ」

「大丈夫ですか？」

と、聞き慣れた沙耶の声もする。

「どうしたの？」

玄関に出てみると、沙耶の肩に掴まって情けない顔をしている親父の姿があった。

「いや、そこで転んで捻挫したみたいなんだ。ちょうど沙耶ちゃんを通りかかって助けて貰ったんだよ」

「おじさん、やっぱり病院行った方が良いですよ」

二人掛かりでソファーに親父を座らせる。

「大丈夫だよ、ただの捻挫だ。幸平、湿布を持ってきてくれ」

そう強がっているが、うめきながら靴下を脱いでいる。
見るからに痛そうだ。通常の足首の倍ぐらいあるように見える。
とにかくそのままにしておけないと薬箱を探した。

しかしようやく探し出した薬箱にも健康家族のせいカロクなものは入っていない。

沙耶ものぞき込んでくる。

「肩こり用じゃダメかな？」

封が開いた箱を出す。同じ湿布じゃないのかな？

「でもこれ貼ったら剥がす時に痛そうだよ」

と沙耶が言う。そういえばサッカー部に常備してあるものは、もつとはがれやすそうだ。

湿布は薬屋に買いに行った方が早いということになり、とりあえずタオルを濡らして冷やすことにした。

洗面所でタオルを濡らして親父の足首に当てる。顔をしかめているから、余程痛いのだろう。

そうこうしているうちにお袋が帰ってきた。

親父の足を一目見て病院に行くことを決め、勤務先の病院——総合病院だ——に連絡を入れタクシーを呼んだ。こういう時のお袋の行動力には脱帽してしまう。

「じゃあ、後をお願いね。足首の骨折だと思うから、入院にはならないと思うけれど、処置に時間がかかるだろうから、夕飯、悪いけど適当に食べてて。」

沙耶ちゃん、ありがとう助かったわ。——じゃあ行ってくるから」

痛みで顔をしかめる親父をタクシーに乗せて二人を見送った。

反省文の功罪

親父達が出かけていくと嵐が去ったように静かになった。

テキパキ指示を出し、あつという間に出かけてしまったお袋のことを

「おばさん、すごい。さすが看護師さんだ」

と沙耶は何度も言っている。

沙耶は、よく家のお袋を誉めている。

誉められるような親じゃないと思うけど、嬉しいもんだ。

「ありがとう、助かったよ。で、親父どこで転んだの？」

「公園を出たことろの階段で」

沙耶とよく遊んだ児童公園。

砂場とコンクリートで出来たトンネルに滑り台があるだけのなんて事のない公園で、その中を通り抜けると駅への近道となるのだが、入口に少しだけ階段があるから自転車では使えないのだ。

「……階段って、3段ぐらいじゃないか。ドジなんだよな、うちの親父」

そう言っただけ苦笑する俺に沙耶はポツリと洩らす。

「良いお父さんだよ。優しくて、温かくて……」

俺は何と答えていいのかわからない。

沙耶の父親は背がスラリと高く、エリートって感じがする格好の

いい人だった。

離婚の理由を沙耶は言わないけれど、その父親の浮気らしい。

何か考え事をしていた沙耶が口を開く。

「……再婚したんだって」

一瞬、沙耶の言った意味がわからなかったから慌ててしまう。
気の利いたことも言えなくて「そうなんだ」としか声を掛けられない。

沙耶の弱気な姿を見ているのが辛くて台所へ立つ。

そして、わざと明るい声で沙耶に言う。

「喉、乾いただろう。ジュース入れるからさ。ついでに一つ頼みがあるんだけど」

「英語の反省文なら、自分でやりなさいよね」

俺の願いは言う前にあっさり拒否された。

「何でわかるの？」

「二組の子が職員室でのやり取りを聞いてて教えてくれたの」

ちえ、おしゃべりな奴が居るもんだ——と、思ったが説明する手間が省けた。

「そこを何とか」

どうしても頼み込まなければと必死な眼差しで沙耶を見る。

沙耶はクスツと笑い、

「そうねえ、夕飯ご馳走してくれるのなら、手伝ってあげてもいいわ」

と言う。

「もちろん作ります。作りますから、お願いします」

いつもの沙耶に戻ったみたいで安堵する。

俺は自慢のチャーハンを沙耶に作り、その換わり沙耶の厳しい指導のもと反省文を書き上げた。

「助かったあ、やつぱ沙耶は頼りになるよ」

「煽ってたって次回は知らないわよ」

「わかりました、ホント反省したから。でもお陰で、部活禁止一日で済みそうだ！浅野からも1日で復帰しろって厳命されてたんだよね。ほんと助かったよ」

「浅野君もサッカー狂なのになぁ・・・」

含みのある言い方にカチンとくる。

「でも自分の世界がありすぎてついていけないなあ」

沙耶の浅野評に頷いてしまう。数学オタクなのだ。

「フェルマーの最終定理」

って俺がつぶやくと沙耶もそうそうと同意する。

合宿の時にフェルマーの最終定理について熱く語られて辛かったことがあったのだ。

きつと沙耶も熱く語られた口なんだと思う。

「沙耶は理解できるの？」

「無理、公式は知っているけど、浅野君が語った話はさっぱりわからなかった」

「良かった。沙耶でもわからないなら安心だ」

「何よ、それ」

「だって沙耶って天才タイプじゃん。何でも理解しちゃうそうだよ」

小学生の時は、本当にそう思ってたこともあった。

先生の質問にいつでもスラスラ答えていた姿は驚異だったんだ。

あの頃、俺は何でも沙耶に聞いていた。

「・・・わかってないなあ。私は努力の人なのに」

ハツとした。俺は沙耶の努力している姿を知っている。

今日だって、沙耶のノートを見て本当は感動したんだ。参考書みたいにわかりやすくてさ。

「ごめん、俺はちゃんとわかってるつもりだよ。沙耶が頑張っていること」

今度は沙耶が驚いた顔をした。そして一瞬だけはいかんだ笑顔を見せた。

それは、とても懐かしい笑顔。俺が沙耶を可愛いと思った時の笑顔だった。

「そっいえばサッカー部っていつ引退なの？」

急に沙耶が話題を変えた。

「試合に負けたら引退」

「ふゝん。試合はいつ？」

「来週の日曜日。地区予選だよ」

「奇跡を祈ってあげるわ」

「ちえっ馬鹿にするなよ」

「勝つ自信あるの？」

「だから練習するんだよ！！！」

いつになくムキになって言う——弱小チームなのをからかわれる
はいつもの事なのに。

追い討ちを掛けるような言葉が沙耶から返ってくる筈が、

「頑張つてね」

と、小さな声で言われた。

「ああ頑張るよ」

俺も不自然な声の調子で答えた。
今日はなんだか変だ。

沙耶と視線を合わさぬよう顔を上げると時計が目に入る。

「うわ、もうこんな時間だ。おばさん心配してない？」

「大丈夫、こんなに早い時間に帰ってきたこと無いから」

「そうなんだ」

「そう、仕事一筋よ。最近、出張も多いしね。お陰で私は静かな環境で勉強出来て助かってる」

「ふーん、そっか」

知らなかった。

中学生の頃、何度かおばさんが出張のために家に泊まりに来てたことがあったけれど、今は一人で過ごしているんだ。

「うちのママは結婚すべきじゃなかったのよ。パパだってママがもっと家庭的な人なら良かったと思っていたんでしょ。今度の相手はそう言う人らしいから」

毒を含んだ言葉を俺は黙って聞いている。それしか出来ない。

「……弁護士になりたいと思ったのは、離婚のゴタゴタで出会った弁護士さんが格好良かったから。親権を巡って大喧嘩してた時に、二人に向かって怒鳴ってくれたんだ——子どもの気持ちを考えるって。その時、私、本当に喧嘩を止めて欲しかったから、だから……嬉しかった。私もそう言う人の痛みを代弁できる弁護士になりたいの」

すごい、沙耶はこんなにキチンと自分のしたいことを考えてるんだ——そう思って感動し、とても大人に見えてドキツとする。

「おまえ、すごいな」

「何で？幸平は考えてないの、将来のこと」

俺は将来、どうしたいんだろう……。

サッカーは好きだけどプロを夢見れる実力がないのは痛いほどわかっている。

ふと親父の姿が目に見えた。

看護師が天職だと言いきるお袋を笑顔で支える親父。

そう言えば家は、家が汚かろうと食事が粗末だろう笑顔だけは絶えなかったな。

お袋が忙しくてキリキリし始めると親父はさり気無くフォローして休ませてた。

沙耶の言う通り良い家なのかもしれない。

「なに真剣に悩み出したの？」

顔を上げると沙耶の笑顔があった。

可愛い—— 一瞬そう思い、慌てて否定する。
性格がきつ過ぎる。

「取りあえず、受験するんでしょう？」

「ああ、一応」

「じゃあ、頑張りなさいよ。のほほんとした幸平のこと好きだけど、たまにはやる気も見せたら」

目を瞬いた—— 今、好きって言わなかったか？

「勘違いしないでね、幼馴染として好きなのよ。私は恋もしないし、結婚もしたくないの」

今度はズキリと胸が痛んだ。何でだ？俺だって別に好きじゃないぞ。

「わかってるよ」

「さあ、そろそろ帰るわ」

沙耶が立ち上がる。

「送っていくよ」

「大丈夫よ」

「いって、コンビニにも行きたいからさ」

そう言っただけも立ち上がった。

沙耶の家までは5分ぐらいの距離だ。

その間、取り留めのない話をして並んで歩いた。

沙耶が自分のことを語ったのは久しぶりかもしれないと、ふと思う。自信満々で目標に向かって邁進しているのだと思っていたけれど違っていた。

今日はやけにいじらしく見える。

小さな肩を抱きしめて、励ましてやりたくなるけど、俺の方が20センチも背が高くなっていて、並んで歩くと男と女だ。

もう只の幼馴染じゃ慰めてやることも出来ないのかな……

「じゃあ、ここで。送ってくれてありがとう」

いつの間にか沙耶の家についていた。

「ああ、また明日な」

俺はくるりと背を向けて、手を挙げて歩き出した。

ゴールは遠く

親父の足首はやはり骨折していて、ギブスをはめた不便な生活になった。

そうになると俺の家事の負担が大きくなる。

「受験生なんだけど」と一応言ってみるが反応はない。家族なんだから当たり前か。

もし一人暮らしになっても立派にやっていけると変な自信だけはある。

部活は最後の試合に向けて馬鹿みたいに燃えていた。

毎日、学校に行って、サッカーやって・・・その繰り返しで、あっという間にカレンダーは変わっていく。

でも俺はちょっとだけ変わった。あの日の沙耶に刺激され、少しは机に向かうようになったのだ。

高校を出て就職しようとするほど気概もないし、今更どこかの推薦も狙えないから受験するしかないだろう。

取り合えず大学に行って、それからもう少し広い視野で自分の将来を考えたいなんて——結局は親の脛をかじらせてもらうことにしたのだ。

いつの間にか雨の季節になり、いよいよ明日が試合だ。

帰りがたまたま一緒になったので、明日試合だと沙耶に伝えたと、「どこことやるの？」と聞かれた。

「F大付属」と、答えたが、サッカーに興味ない沙耶は「ふん」と言うばかり。

だから俺は優勝候補の一つだと教えてやる。

「そうなんだ。大変だね」

つてまるで他人事。そりゃ他人事だけど・・・勝ちたかったのに相手が悪い。

抽選で組み合わせが決まった時の落胆を思い出し、俺はブルーな気分になりました。

俺の気持ちに気付いたのか

「そんな顔しないでよ。勝てますようにって祈っておいてあげるわよ。」

それに万が一でも勝てるかもしれないじゃない。頑張つてね」と励まされた。

「頑張るよ」と答えたものの俺は少し寂しい気持ちだった。

見に来てよって言葉が頭の中を過るけど、それを口にする事はなかった。

そして俺たちのサッカーの試合。

梅雨だというのに嫌になるほど晴天で、それでも俺達はボールを蹴って走り回った。

滝のように流れ落ちる汗が時々目に入る。
さすがに優勝候補に挙げられるチームらしく、パスもドリブルも上手く技術の差が歴然としていた。

でも俺たちにだって意地がある。何とか1点を取りたいとみんな必死で走りまわる。

これが俺たちのサッカーだ。進学校だってなめるな！体力強化をするために地道な基礎練習を頑張ってきたんだ。

前半はゴールを死守し、何度かチャンスもあった。ゴールポストに当たるシュートもあったのだ。

あと少しで点が取れそうだった。

しかし、後半になると、相手チームのペースにはまり俺達はバテて行く。

必死に守ったゴールを2度も奪われた。

ゴールが遠い。

結局2 - 0で試合終了のホイッスルが鳴る。

終わった・・・・・・・・・・グラウンドに倒れこむように横になり空を仰ぐ。

部長の浅野が俺に手を差し出してきた。

「終わったな」

「ああ」

「勝てそうだったのになあ」

「ああ」

「3年間、お前とサッカーやれて楽しかったよ」

「俺もだ！」

汗だくになったユニフォームを脱ぐ。

浅野も脱いで上半身裸のまま俺達は、もう一度グラウンドを走った。ふと見上げたスタンドに沙耶がいた。

「沙耶？」

気が付いて声を掛ける。

「図書館に来てたから………残念だったね」

「ああ」

「じゃ、帰るから」

踵を返して出口に向かう沙耶の目が潤んでいた気がする。

「ありがとな……！」

気が付かないフリをして俺は背中に声を掛けた。

地区予選に敗退しておれたち3年生は引退した。

毎日、暇になり、お袋に何気なく塾にでも行こうかなと話した途端、パンフレットの山が差し出された。

「母さん、あんたが自分から行くになつてくれるのを待ってたのよ。何処でもいい、お前の行きたい塾を選んでちょうだい」

勉強しろ、勉強しろと煩く言われた覚えはなかった。

どんなに成績が下がってきても気にしてないのかと思ってたけれど心配してたんだと、急に気が付いた。ごめん。

そして俺は、取り合えず学校の帰りに寄れそうな所にある塾を選び通い始めた。

何のために勉強するのも、これからどうしたのかも未定のまま・・。

故意ではなく事故です！（前書き）

しばらくぶりの更新です。忙しい夏がようやく終了したので、また少し更新していけると思います。

故意ではなく事故です！

受験生の自覚もないまま塾に通い始めたが、志望校と言われても思いつかない。

学校の授業を受け、予備校に行つて授業を受ける。

とっても単調な生活だ。何も楽しみがない。

家に帰ればダラダラとテレビを見てしまい、そのくせ寝る前には後悔していた。

沙耶のように志望校も決まり、黙々と勉強に向き合っている奴も多いから気持ちだけは焦るけれど、問題集を開いても進まないのだ。

事件が起こつたのは夏休みに入る直前だった。

掃除当番に当っていた俺は、箒を持ったまま物真似の上手い坂井の芸をゲラゲラ笑って見ていた。

ヒョイと机に腰掛けようとしたら、如何した事が大きくバランスを失つたのだ。

「わあっ！」

よろめいて何かを掴んだ気がするが、バチンと言つ音と共に頬に痛みが走り、俺は床に転がっていた。

「痛い……」

俺は机と共に床に寝転んだまま上を見上げると、顔を真っ赤にした沙耶が立っていた。

「最低！」

そう言って走り去っていく。

俺は啞然と見送るしか出来ない。

何が起こったって言うんだ——バランス崩してぶつかったぐらいで何でビンタされるんだ。

坂井の手を貸り置きあがると、女子達の冷たい目が睨んでいた。

「何だよ」

「沙耶の胸、触ったでしょう」

はっ？わざとじゃないでしょう。偶然そこにあったんだよ……なんて言い訳聞いてくれる雰囲気じゃなかった。

柔らかい感触のものだった気がするが——俺に悪意はない。

他の女子ならともかく沙耶にだけはない！

違う、違うを連発しながら俺は教室を逃げ出した。

殴られたのは俺だ、怪我を心配するぐらいの優しさはないんかい。

俺は一人で腹を立てる。少し遅れて坂井が出てくる。

「よお！大丈夫かい」

「ああ、何とか」

「やったな、井原の胸の触り心地はどうだった」

「はあ、お前まで勘弁してくれよ」

「触ったんだろう？」

「覚えちゃいないよ。一瞬のことだぜ」

俺は不機嫌になり坂井から離れる。

関係ないぜ——そんな事で怒るなんて沙耶もどうかしている。
どう考えたって事故だってわかるじゃないか……ちえ、面白くない。

慚然と帰途につくが、今日は俺の炊事当番だからスーパーに寄らねばならない。

それも腹立たしかったけれど、頭の中は理不尽な沙耶のことが駆け巡っていた。

理解不能だ。取っ組み合いの喧嘩だったことがあるじゃないか。

小学校の低学年の頃は一緒にお風呂に入った事だってある。

同じ布団で寝た事だってあるじゃないか！

今更、ちよつと胸を触ったぐらいであんなに怒ることはないだろう。

しかし、沙耶の胸って軟らかかった……そうじゃない、そうじゃない……頭を振ると、沙耶の泣き出しそうな顔が目に見えた。
女の子なんだもん、あれでも。シヨックだったんだろうな。

俺はスーパーのカゴを下げ、物思いに耽っていた。

「今夜のメニューは何？」

突然、沙耶が目の前に現れビクリする。

ずっと沙耶のことを考えてたからドギマギして顔をまともに見られない。そっぽを向いたまま謝った。

「ごめん」

「いいよ、わざとじゃないの分ってたから……私こそゴメン。ビッ

クリして手が出ちゃった」

「それはもういいよ」

やっと顔を見合わせ、クスクスと笑い合う。

「スーパーでカゴ下げて、色気ないね私達」

それもそうだと苦笑する。

「今日の夕飯何にするの？」

「ポトフ」

「えっ、何それ？」

「知らないのか、野菜とベーコンやウィンナーを煮込んだスープだよ」

「知らない。美味しそう」

「美味いぞ！俺の自信作だもんね。食う？」

うんと沙耶が頷いたので、俺は沙耶を家に誘った。
この時は本当に下心など微塵もなかった。

「じゃあ、着替えたら行くから、作り方教えてね」

と、沙耶は帰っていった。俺も冷蔵庫の中身を思い浮かべながら足りない物を買って足していった。

思い掛けない展開に

家に帰り、ドサツと買い物袋をテーブルの上に置き、ソファに座る。

お袋が取り込み忘れた洗濯物が目に入る。

夜勤の日は洗濯物を取り込んでから出掛ける約束なのだが、2回に1回は忘れていくので、確信犯だと最近は思う。

仕方なく洗濯物を取り込み片付けた。ようやく制服を脱ぎ、Tシャツとジーパンに着替えると、チャイムが鳴った。

玄関に出迎える間もなく、

「お邪魔します」

と、慣れ親しんだ様子で沙耶が勝手に入ってきた。

「鍵かかってなかったよ。無用心」

「おまえが来ると思ってたよ。開けておいてやったんだよ。閉めてくる」
「やっておいたわ」

そう言いながら沙耶はコンビニの袋を俺に渡す。
中身はシュークリームだった。

「さんきゅ。後で食べようぜ」

シュークリームを冷蔵庫に入れ、俺は夕食の支度を始める。
まず米を洗い炊飯器にセットした。

冷蔵庫から野菜を取り出す。

ジャガイモや人参の皮を剥き下準備をする俺を沙耶は食卓の椅子に座ってニコニコ見ている。

「なあ、普通は反対だと思わないか」
「思わない」

あつさり否定される。やっぱりな。

俺は鍋に具材を入れて火に掛けた。
後はじっくり煮込むだけだ。

正式なレシピも何も知らないけれど、気の向くままに料理を作るのが好きだ。

だから、時には滅茶苦茶な味の物も出来あがる。

まあ、このポトフは何度も作っているからそんな失敗とは無縁だが。

「料理が出来上がるまで一緒に勉強しよう」

と、沙耶が頼もしい提案をしてくれる。

「そりゃ、助かる。英語に漢文の宿題だろ、俺にとっては地獄だよ」
「理系の科目は大丈夫なのにな」

「あんまり自慢になるような点は取ったことないけどな」

「今までは、でしょ？」

沙耶は俺がここの所やる気を出しているに気が付いてくれてたんだと嬉しくなる。

宿題を広げると沙耶に『そうじゃない』『違う』を連発されたが、何とか終了させた。

台所からは良い匂いが漂い、お腹がググウと鳴り出したので、急い

で盛り付け食べ始める。

沙耶は美味しいを連発してくれて、それはそれで気持ちのいいものだ。

友達の噂話や先生の話など取り留めなく話していると電話が鳴った。

電話の向こうからは親父の声。

『幸平、父さんこれから夜釣りに行くから。留守番頼むよ』

「何だつて。夜釣りつて、足、大丈夫なのか？」

『ああ、ギブスも取れたし、太田さんたちと快気祝だ。母さんには事後報告つてことで、じゃあな』

「じゃあな、じゃないだろう。道具はどうするんだよ」

『こんな事もあるうかとロッカーに道具一式置いてあるんだよ。そうだ、今日、母さん夜勤だからな戸締りしつかりな』

言うことだけ言って電話は切れた。

親父の唯一の道楽は釣だ。

骨折して泣く泣く我慢してたようだけど、ギブスが取れたんで喜び勇んでいる姿が目に見えかぶ。

お袋に止めれないように夜勤の週末を狙ったんだ、きつと。

受話器を置いて振り返ると沙耶が俯いている。

「……沙耶」

声を掛けると顔を上げたけど、目から涙が溢れそうでビックリだ。

「どうしたの？」

何でもないと言を小さく振ったけど、涙がポロつと零れ落ちた。

「……ゴメンね。ホント何でもないの。やだなあ、何で涙が出るのかな。おじさん、たくさん魚釣れるといいね……」

俺は不意に涙の訳に気が付いた。

既に再婚し新しい家庭を築いている父親のことを思い出したんだ。俺と親父の間にある確かな絆。その絆をあつさりと断ち切った沙耶の父親。

さっきの電話で沙耶はその違いを感じ取ったんだ。

ポロポロと零れ止まらない涙は、懸命に感情を押し殺そうとしているように見えるのだ。

そして、おばさんがお袋に「離婚が決まっても、沙耶は冷静な子だから、あつそうと言っただけなの」と話していたのを思い出す。本当はそんな筈ないじゃないか！家族3人で穏やかに過ごしたかったに決まってる。

なのに、自分の感情を押し殺していたんだ。

あいつは頭がいいから、冷静だから親の離婚をすんなり受け入れたんじゃない。

優しいから母親がそれ以上傷つくのを見ていらなかったんだ。なのに、なんで子供が親の為に泣くのを我慢しなくちゃいけないんだ！

無性に悲しくなって、自分でも驚いたけど、俺は沙耶を抱き締めていた。

「幸平？」

俺の名を口にするけど、昼間のように叩かれることは無かった。

「……泣いていいから」

気の効いたことは言えないけど、沙耶は頷き声を上げて泣き出した。小さな子どものように泣きじゃくる姿は、まるで溜めこんでいたものを一度に吐き出しているように見えた。

腕の中に抱き締めてる沙耶は俺の顎までしか背が無い。細い肩と軟らかな感触に俺の中に不思議な感情が生まれていた。

いつの間にか沙耶は泣き止んで、それでも俺の腕の中に身を委ねたまま静かに時間が流れて行った。

「沙耶」

そつと彼女の名前を呼ぶ。

沙耶が俺を見上げ瞼を閉じた。

二人の唇が自然に重なる。触れ合うだけのキスだったけどすごく甘いものだった。

「帰らなきゃ、ママが帰ってくるわ」

沙耶の言葉に我に返り、時計を見ると9時を過ぎていた。

「あつ、ごめん。送るよ」

するりと腕の中から抜け出して沙耶は困ったような顔をしている。
俺もきつと同じ顔をしていると思う。唇に残る軟らかな感触に戸惑
っていたのだ。

視線の先は悩みの種

その日の夜、俺はなかなか眠れなかった。

沙耶は只の幼馴染だ。それ以外、考えられないのに、雰囲気になされてキスをしてしまった。

俺のファーストキスだ！たぶん沙耶も……。

何でだ、何でだ！

慰めてやりたいとは思った。泣き顔が痛々しくて辛かったのも本当だ。

「うわー！！！！！」

自分の気持ちのモヤモヤを晴らしたくて大声で叫んでしまう。

こんな時は、親父もお袋も留守で良かったと心から思う。どうした？と聞かれても困るだけだっただろうから。

次の日、俺は殆ど眠れないまま朝を迎え、無理やりパンと牛乳を口にして家を出た。

いつもより少し遅い時間だから沙耶には遇わないだろうと思っていたのに、駅の前で姿が見えた。

別にやましい事などないけれど、瞬間的に俺は身を隠す。どんな顔して遇ったらいいのかわからない。

でも沙耶はいつもの通りスタスタと歩き、当たり前だけど俺を探す素振りも見せずに改札口に消えて行った。

只でもさえ遅刻ギリギリだったので、沙耶の姿を見送った俺が教室へ着くと、既にホームルームが始まっていた。

静かに扉を開けて教室へ入った途端、担任と目が合う。

「遅いぞ、滝川。今日は見逃すが、次回からは遅刻だからな」

気さくで良い担任なんだが、今日はこんな些細な小言まで気分を鬱にさせる。

「はい、気を付けます」

口先でそう答えて席へ着く。

ピリツと背筋を伸ばし真っ直ぐ前を向いて、いつもと変わらない姿だった。

「……連絡事項は以上だ」

沙耶をボーッと見つめていると担任が話しを終えて教室から出て行くのが目に入る。

坂井が振り向いて声を掛けてきた。

「幸平？何ボーっとしてるんだよ」

「あ、いや別に。ちよっと寝不足なんだ」

「井原のこと、見てたのか」

「ぶあ、何トンチンカンなこと言ってるんだよ」

「なんだ、違うのか。そうか、そうか。まっ良いけどさ」

意味ありげな微笑を残して坂井は前を向く。沙耶はどう思っているんだろう。やっぱり眠れなかったりしたんだろうか？

唇に微かに触れた柔らかな感触を思い出しながら、俺は自分の中の不思議な感情を持て余していた。

それなのに、沙耶はいつものまま何も無かったように振舞っていた——女って解らない。

その日、ただでもさえ鬱々していた俺を更に悩ます出来事が起きた。

「なあ、幸平。ちよっと頼みがあるんだ」

坂井がそう言って来たのは、帰り支度を済ませた時だった。

「何だよ、頼み事って」

「だからさあ……。ここじゃ何だからマック行こつぜ」

「マック？俺、小遣いピンチだからさあ、ここでいいじゃないか」

「奢る、奢るからさ」

「なら、いいけど」

俺が承諾すると無言で坂井は歩き出した。

マックは学校から2つ先の駅前にある。

その間、俺が何を聞いても適当な言葉が返ってくるだけで、頼み事の欠片も漏らさない。

「何でも奢る」

「そうか……。じゃあビックマックとコーラ。セットで」

「それ、二つ」

坂井が注文して、商品を受け取って窓際の席につく。

直ぐに話し出すのかと思ったが猛烈な勢いで食べ始めたので、俺もそれに従った。

一通り食べ終わると坂井はまた口を閉ざした。

痺れを切らして俺は訊ねた。

「どうしたんだよ」

「…お前さ、井原の幼馴染なんだよな」

「ああ小学１年から一緒だよ」

「ただの幼馴染なんだろう？」

「あつ当たり前じゃないか。あんなキツイ奴は幼馴染で充分だ」

言いながら俺は、すぐドキドキしていた。昨夜のキスの感触が甦る。

「誰か好きな奴がいるのかな……………」

「へっ誰が？」

「……………井原だよ！」

ちょっと待て、坂井の言いたいことが解った気がした。
でも、俺、それを聞いたら……………。

「知らないよ！そんなこと本人に聞けよ」

俺は坂井から目を逸らし、残りのポテトを全て口に押し込んだ。
視線が向けられているのが辛い。

「そうだよな、幼馴染だつて言っただけで何でも知っている筈ないよな。ごめん、忘れる」

肩の力が抜けた気がした。

「奢ってもらったのに、役に立てずに悪かったな」

「いや、いいよ。気にするな。そういえば明日のレッツの試合、楽しんだよな。布川が復帰するらしいし」

「それホント？朗報だ！！あつ……………」

「どうした？」

「明日は塾の日だ」

「仕方がない、俺が試合経過をメールで知らせてやるよ」

「頼む、持つべきものは親友だ！」

沙耶の話をしていたことなど無かったように俺達は話し続けた。

アイツの思いが解ったように坂井にも俺の気持ちが伝わったのかしれない。

ただの幼馴染だった筈なのに……………。

そして俺も沙耶も坂井も、何事も無かったように振舞って1学期は終了し、嬉しくない通知表をもらって夏休みが始まる。

その駅は危険地帯かも。

青春の真っ只中、受験生の俺達に夏休みは残酷だ。

毎日のようにある夏期講習。

冷房の効いた室内から屋外へ出る時の何ともいえない倦怠感。

去年までは、部活の練習でグラウンド走っていた。辛かったけど、楽しかったと思う。

汗かいて疲れ果ててベツトに倒れこむ——それって幸せだったんだ。

でも、今は感傷にひたっていられない。俺は、受験生だ。

志望校もいくつか見繕ってある。

化学と生物は好きだ。ひよっとしたら得意かもしれない、だから薬学部なんてどうかと思っている。

問題は、合格できるレベルまで勉強が追いつけるかということだ。

「幸平！」

後から声を掛けられた。振り向かなくても誰か判る——沙耶だ。

「おまえも塾だったのかよ」

前を向いたまま答える。

「おまえもって、幸平も塾だったんだ」

「まあな」

「同じとこだったら良かったのに」

「やだ」

「なんで？」

「ったく、いいじゃないか、そんな事」

沙耶と一緒に塾じゃなくて良かったとつくづく思う。自分がどうしたいのか解らないから。

「それもそうね。私と一緒にじゃない方がいいのよね、幸平は」

「別にそう言うわけじゃないけど」

「いいよ、無理しなくても。さ、早く帰ろう」

あっさり言う沙耶とこのまま帰るのはツマラナイ。

「腹減ったな、何か食べていけないか？」

「うーん、どうしようかな」

そう言って沙耶は腕時計に目をやった。一瞬、キツイ表情を浮かべる。

「ね、私、行きたいところあるんだ。時間あるんでしょ？付き合つてよ」

「いいけど、どこ行くの？」

「行けば分かるよ。今日は土曜日だから、たぶんいる」

「いる？誰が？」

「煩いな、行くの？行かないの？」

「行くよ」

家に帰って勉強する！！！！っていつも言う沙耶に何が起こったのだろう。

俺は訝しく思ったけど、その疑問を口にするのではなく沙耶の後ろから付いていく。

今、出てきた改札を再び通り、俺達は再び電車に乗った。学校のある駅を通り過ぎて大きなターミナル駅に着く。

「ここで降りるから」

黙って頷いて俺は沙耶に従った。

あれから殆ど沙耶は話さなかったから、俺が一方的にサッカーの話だの、塾の変な奴の話だとかをして間をつないでいた。

無口なまま沙耶は駅前のロータリーに向かう。
その先はちよつと知られたホテル街。
俺は心臓の鼓動が早くなっているのを感じる。

その時、歌声が聞こえてきた。アコースティックギターとキーボードの二人組みが切ないメロディーを奏でていた。

「中野裕也？」

「そう、ここで毎週土曜日歌ってるんだ」

「へー知らなかった。何で沙耶が知ってるの？」

「中野君から教えてもらったから、時々来てる。結構ファンがいるんだよ」

歌声に耳を傾けている沙耶の顔が微笑んでいる。

曲が終わって拍手が沸き起こった。俺も拍手を贈る。

中野が顔を上げ沙耶と目を合わせて、それから俺に視線が向いた。

中野に冷たい顔をされたと思った。

ひょっとして沙耶との間に何かあるのだろうか？——何かって・・・。。。。

ギターの奴が何かを話して次の曲が始まる。

今度はリズム感の心地いい曲だったけど、好きな奴が振り向かないって内容で、中野が時々、沙耶に視線を向けるのが気になった。

隣の沙耶をチラリと見ると楽しそうに聞き入っている。
何度も聞いているのか小さく口ずさんだりして、俺は面白くなかった。

路上ライブが終わり中野と話す。

「井原が連れて来てくれたの？来てくれて、ありがと」と言われたので

「教えてくれば、もっと早く来てやってたよ」と、返した。

だけど俺の内心は疑心暗鬼でいっぱいだった。

「悪い悪い。あのガツコじゃ浮いてるからさ、俺。言いづらかったんだよ。おまえも受験生になったからな」

おまえも受験生だと思うぞと俺は心の中でつぶやいた。達観しているのかあきらめているのか、中野裕也って奴はよくわからない。

「今日もたくさん聞いてくれてたね。固定ファンも出来てきたみたいじゃない？」

俺の苛立ちなど知りもしないで、沙耶が微笑を浮かべて話すのもシヤクに触る。

「まあね。今度、自主制作CD作ろうと思ってさ、そんな時は二人とも協力よろしく」

「ああ、声かけてくれ」

中野の相棒が何事か話し出したのをきりに俺達は帰ることにした。

「いつから知ってた？」

「3年になって直ぐぐらい。偶然、ここで見つけたのよ」

「そうなんだ。結構いい歌、歌ってるじゃん」

「私もそう思う。それで時々、来てるの」

ここに来るまでの無口な沙耶とは別人のように機嫌が良くなっている。

横を歩く沙耶の気持ちを知りたい。

キスの感触だけが甦る。

俺達は手も繋いでいない。

ただの幼馴染のままなのか……………。

「中野を好きなのか？」

唐突に俺の口から漏れた言葉。

「えっ？」

立ち止まって俺を見つめる沙耶。
怒ってる、そう解る顔をしている。

「サイテー！」

そっ払い残して沙耶は走り去ってしまった。

「沙耶！」

俺は名前を呼ぶことしか出来なかった。

伝えたい想いはあるけれど、言葉にすることが出来ない気がした。

トンネルの中の君

その後、俺はトボトボ家に帰った。

塾の問題集をとり合えず机に広げてみたが、沙耶のことが頭から離れない。

どうしてあんな事、聞いたのだろう。

あの笑顔が悪いんだ。

俺の心に浮かぶ言葉を必死に打ち消す。

沙耶の気持ちを知りたかった。

日が沈むには早い時間に暗くなったかと思ったら夕立だった。

ベランダに干してあった洗濯物を取り込んでソファに置くと、玄関で音がする。

お袋が帰ってきたようだ。

「幸平、いる？」

また雑用を言いつけられるのかとウンザリした気分で部屋を出る。

「何？」

「沙耶ちゃん、来ていないわよね」

「沙耶？来ていないよ。どうしたの？」

「喧嘩して飛び出して行ったらしいのよ。今、そこでママに会ったのよ」

「飛び出していったって、この雨の中を？何、喧嘩したんだよ」

「沙耶のママ、再婚することになってね……………」

再婚？俺は沙耶の泣き顔を思い出し、玄関の傘を引つ掴み外に駆け出す。

「沙耶！」

雨の中で俺は叫んでいた。

沙耶の顔を思い出す。

何か話したいことがあったのだ、なのに俺は気付いてやることも出来ずに……………

沙耶の行きそうな場所を考える。

取り敢えず中野達のいた駅に向かおうかと公園の横の道を走りだした時、昔よく隠れていた遊具を思い出した。

公園の隅にあるログハウスのように丸太で作られたトンネル。

大人たちは狭いから入ってこない絶好の隠れ場所だった。

小学校3年の時、近所の子と喧嘩で相手を泣かしたと怒られて、悔しくて俺はあそこで泣いていたんだった。

気が付くと沙耶がいて、イチゴミルク味のキャンディを口に入れてくれた。

小学校4年の時、沙耶が傘を壊されて、ここで悔し泣きしてた。サッカーでレギュラー外された俺を沙耶が見つ付けてくれたのもそこだ。

駆け回って遊んだ記憶。

ちっちゃな打ち明け事もしたなあ。

そんなことを考えながら俺はその遊具に近づいた。

激しい雨で公園の中はアチコチ水溜りが出来ている。

丸太のトンネルを覗き込むと沙耶がいた。

俺は、ほっと胸を撫で下ろす。

窮屈なそのトンネルに体を潜り込ませる。真っ直ぐ座るのも難しいほど狭い場所だ。

「幸平？」

沙耶が気配に俺に気が付く。

俺は何も言わず横に座る。

ジーンズの後ポケットにあるものを思い出した。

眠気覚まし用のガムだ——色気がないなと思いつつ、それを取り出し沙耶に渡した。

「ありがとう」

雨の音が激しくなる。沙耶は雨に濡れたようで少し寒そうに見えた。

その時、稲妻が走り、ドーンと大きな音がする。

沙耶の口から小さな悲鳴が漏れた。

そう言えば沙耶の唯一の弱点は雷だった。

小学生の時、俺の家で二人で留守番していて、あの時もすごい雷雨で泣いたんだった。

再び稲光が起こり、その瞬間、沙耶は俺にしがみついてきた。狭い遊具の中で密着している沙耶の体は寒さと怖さでガタガタ震えている。

「ここなら大丈夫だよ。ちょっと待ってろ」

そう言って俺はTシャツを脱ぎ、それで沙耶を抱え込んだ。

「こうしてたら、少しは暖かいだろ？」

ウンと頷く沙耶。

ギュッと沙耶を抱きしめて、俺は雨音を聞いていた。

雷鳴の先に見えたこと

そして、だいぶ時間が経った頃、雷が遠ざかり雨音が小さくなっていく。

俺は腕の中の沙耶に聞く。

「何があつたんだ？」

沙耶が身体を硬くするのが解る。

「ママ、再婚したいんだって」

「……………そっか」

もつと気の利いたことを言いたいけれど、人生経験の浅い高校生の俺には、掛ける言葉を見つけれない。

「それは、いいの。祝福できる自信あるから」

「そっか」

「嫌だつたのは……………」

沙耶の声が泣き声に変わった。

「…新しいパパと3人で……………幸せになろうって……………言われて、それが……………どうしても、嫌だつた」

「そっか」

やっぱり俺は何も言えない。

沙耶は声を押し殺して泣いている。ついこの間も父親のことで泣いていた。

——守ってやりたい

その瞬間、唯一つ思っていたこと。方法も何もわからないけど、そのことだけ思って沙耶を抱きしめていた。

濡れたＴシャツ越しに沙耶の体温を感じる。

華奢なのに、やわらかい。

いつの間にか雨は止んでいる。

抱きしめていた体を離し、俺たちは狭いトンネルから抜け出した。

雨上がりの公園はとても静かで、電灯の灯りだけが煌々と輝いている。

いつの間にか虫がたくさん集まってきていた。

外に出た俺達は、ちよっぴり恥ずかしくて、わざとはしゃいだ声をあげた。

縮こまった身体を思いつき伸ばして、俺はブランコに乗る。

小さい時みたいに立ち乗りして、思いっきり揺らした。

「沙耶もやろうぜ」

「子どもみたい」

そう言いながら沙耶も乗る。

「靴の飛ばしっこ、したよな。誰が一番遠くへ飛ばせるかって」

「やったね。私、苦手だったんだ、あれ」

「おまえメチャクチャ下手だったもんな。いつだったか前に飛ばさ

ずに後に飛ばした事があってさ……」

沙耶の飛ばした靴はブランコの後の茂みに入って……。

そうだ、その靴を探しに行つて俺達は死にそうな子猫を見つけたのだ。

ブルブル体を震わせ、弱々しい声を微かに出していた汚れた子猫。

沙耶がそつと抱き上げて、

「動物病院に連れて行かなきゃ死んじゃう」
つて騒ぎ出し、俺が一緒に行つたんだつた。

俺の家も沙耶の家もペット禁止のマンションだったから動物病院なんて知らなくて、隣町にあるって聞いて道を尋ねながら探したのだ。

「チビ、どうしてるかな」

同じ事を思い出していたようで沙耶が聞く。

「元気だと、いいよな」

——古い木造の建物に『山本動物病院』と剥げかかった看板がかかっていた。

いきなり拾った子猫を連れてきて怒られないかとドキドキしながら扉を開けた。

「午後の診療は4時からだよ」

そう言いながら現れたのは、ひよろひよろのお爺さんだった。俺が緊張のあまり何も言えずにいると、隣に居た沙耶が公園で子猫を見つけた経緯を話していた。

怒られるかと思っただけで、山本先生（後でわかったのだけれど、そのひよろひよろのお爺さんが獣医さんだったのだ）が子猫を沙耶の手から受け取ってくれた。

「だいぶ弱っているからね。助けられるかどうか難しいかもしれない」

山本先生は、そう俺達に言った。でも、何とかしてあげたくて俺と沙耶は泣きながら頼んだのだ。

そして、それから毎日、毎日、放課後は山本動物病院に行って『チビ』の世話をするのが俺達の日課になった。

でも、元気になった『チビ』を引き取ることは俺達に出来なくて、山本先生が飼い主まで探して来てくれたのだった。

今、考えると治療費を払った覚えがない。あれは先生の厚意でやってくれたことなんだろう。

『チビ』が貰われていく日まで俺達は動物病院に顔を出した。

動物病院にペットを連れてくる人はどの人も我が子のように心配し、待合室では自慢話も聞かされた。

ペットを飼えない境遇の俺達は随分、羨ましく思ったものだ。そして山本先生に強く憧れたのだ――

「何、思い出に浸ってるの、山本先生のこと？」

「何で解るの？」

「解るよ、あの頃の幸平は山本先生みたいになるって言ってたじゃない」

「山本先生って獣医だったんだよな」

「そりゃそうでしょう。動物病院経営してたんだから」

「サッカー始めて、それから時間が無くなって行かなくなったんだ。忘れてた。あんなに強く思っていたのに……」

獣医と言う職業が頭に浮かんだ——浮かんだ途端にコレだ!と思った。なれるかどうか判らないけど、俺、夢を見つけたかもしれない。会いたいと思った。そして獣医って仕事について聞きたくなった。

「山本先生どうしてるかな？」

俺の問いに沙耶が残念そう教えてくれた。

「何年か前に偶然、会ったのよ。もう引退して病院も閉めたんだって」

「知らなかったって言うか、さっきまで忘れていた……」

「仕方がないよ。人は忘れっぽいもの」

沙耶の声の言葉が悲しい。涙の跡が目に入る。

「俺、一番大事な気持ちは変わらないと思ってる」

「えっ？」

自分の口から出た言葉に俺自身が驚いた。

頭の中でぐるぐる回る思いを言葉にしようと頭を働かせ、

「親は子供のこと、いつも大切に思ってるんじゃないかな。その思いが子どもにとって良いか悪いか別だけど」

そう付け加えた。ほんととは違うことが言いたかったのに。

「いつも私の望みとは違うことが起きる…。私の気持ちなんて考えていないんじゃないかって思うの」

沙耶のやるせない気持ちが伝わってくる。

「私、新しいパパが欲しいわけじゃない。ママには幸せになって欲しいけど……」

揺れるブランコの音が耳につく。

沙耶を守ってやりたいという感情が溢れだす。
その時、俺は心底、そう思ったのだ。

「沙耶、俺と結婚して新しい家族になろう」

だから俺は、沙耶にそう告げた。

沙耶は驚いて俺の顔を見つめる。俺も沙耶を見つめ返した。

「10年後にもう一度言ってくれたら考えるわ」

そう言って沙耶は笑った。

「私達、付き合ってもないんだよ。ものには順序ってことがあるの」
俺もそれもそうだと笑った。

沙耶がくしゃみをする。雷雨に遭ってびしょ濡れだったことを思い出す。

「風邪、引くぞ。意地張ってないで帰れよ」
「うん」

沙耶は頷いてもう一度笑った。
俺のＴシャツを肩から羽織った沙耶とランニング姿の俺。
ちよつとマヌケな感じだと二人で笑って、俺は沙耶の手をそつと握り歩き出した。

沙耶の手が少しだけ握り返してくれるのを感じた。
俺は、それだけで良かった。

傍に居てやる——今、俺に出来る唯一のことだから。

砂場を通り抜け公園の外れまで来た時、沙耶が口を開いた。

「……この公園でよく遊んだよね」

子供の頃は本当によくここで遊んでいた。今、見みると、小さな公

園なんだけど、とても楽しい場所だった。

「小学校の時、私が生意気だって意地悪されてて、ここでそいつにすごい勢いで体当たりしてくれたこと覚えてる？」

そう言えばそんな事あった気がする。その後、突き飛ばした相手が怪我して——と言ってもかすり傷だったけど——その親が怒鳴り込んできたんだった。

「あの時、嬉しかった。おばさんやママがどんなに喧嘩の理由聞いても幸平、話さなかったんだよ」

「そうだったか？」

「そうだったの。私を庇ったって言えば良かったのに、何も話すなっって言っただよ」

思い出した。あの頃、口が達者な沙耶はその事で虐めにあってたんだ。

そいつは理屈で言い負かされると物を隠したり、仲間外れにしたり、陰湿なことやってたんだ。

その時も沙耶は親に隠れて泣いていた——その姿を知っていた俺は、正義感ぶるつもりはないけどそいつを許せなかった。

「ありがとう」

「へっ？」

俺は間抜けな声を出す。

「何が？」

「……幸平はいつも私のこと見ていてくれたから。私の辛いことみ

んなわかつちやうんだもん」

いや、そうでもないんだが……そうかもしれない。

いつも心配だった気がする——キツイ性格の裏にある淋しがりやの部分を知っているから。

ずっと見つめて、いつでも隣にいてやりたかった。

二人の想いが繋いだ手から伝わる気がした。

俺が沙耶を家に送ると、玄関に出てきた沙耶の母は、ゴメンねと謝りギョツと抱きしめた。

良かった。どうすることが一番良いことなのかは解らないけれど、互いに思いあっていることだけでも確認できれば前進出来る筈だ。

帰り際、沙耶がもう一度、俺に礼を言う。

「もう喧嘩するなよ！」

と、俺は軽い調子で言い歩き出す。

雨が上がり、またジメジメした夏の夜になっていた。そして今度は俺が盛大なくしゃみをした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7091t/>

足跡の理由

2011年12月17日10時52分発行